

SNS利用で会話能力が伸びるのか

— Can Do Statements と交流後の意識調査を基にして—

西花恵子* · 松下由美子** · 坂本正***

(e-mail: nishihanak@yahoo.co.jp · dnrdnr1130@gmail.com · tadsaka@nufs.ac.jp)

<目次>

- | | |
|----------------------|------------------------------|
| 1. はじめに | 6. 結果と考察 |
| 2. 先行研究 | 6.1 SNS交流群と非交流群の間のCan-Doの達成度 |
| 3. Can Do Statements | 6.2 SNS交流群の交流の前後における変化 |
| 4. 研究課題 | 6.3 SNS利用に関する学習者の印象 |
| 5. 調査 | 6.4 日本語能力に関する意識調査 |
| 5.1 調査協力者 | 7. 今後の課題と次回調査への提案 |
| 5.2 調査方法 | |

キーワード：会話能力(Conversational ability), SNS交流(communication with SNS), 能力記述文(Can Do Statements), CEFR(*Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment*), 文化理解 (Cultural Understanding)

1. はじめに

インターネット時代が始まったと言われて久しい。語学教育の世界にも今では色々な教材が簡単に手に入れられる。分からない言葉を、紙の辞書を引いて、外国語を学んでいた時代が懐かしく感じられる人も少なくないであろう。自分の家に居ながらにして、海外の人と通信、交信できるインターネットを語学教育に生かさない手はないであろう。学習効果が出るかどうかはやってみないとわからないが、少なくとも文明の利器のインターネットを活用したい

* 培材大学校、助教授、日本語教育

** 韓南大学校、助教授、日本語教育

*** 名古屋外国語大学、教授、日本語教育

と思うのは今の時代においては当然の流れであろう。本稿は、松下・西花・坂本(2018)で韓国人日本語学習者がどのような SNS(Social Networking Service)を使っているのかについて調査、報告しているが、実際にSNSを活用して、どういう効果が出たかのかの報告までではできていなかったため、SNS活用の効果を調べるために、実際に日本人との SNS交流に参加した韓国人日本語学習者の口頭能力が伸びていると思うか、Can Do Statements (能力記述文) のアンケートを通して調査した結果を報告する。

2. 先行研究

SNSの活用の効果を検証した研究には、大塚(2008)、阿部(2010)、村上(2015)などがある。

大塚(2008)は韓国の大学院生を対象に、SNSを利用した日本語作文授業を行い、韓国での対面授業とSNSを利用した遠隔授業を実施し、問題点を把握し両者を統合した授業の有効性について調査した。韓国人教師による対面授業と、日本人教師のDaum café(インターネットコミュニティ: インターネット掲示板) を利用した作文の個別指導を通じて、作文のデータベース化が可能になったため、掲示板に投稿された作文を学習者間で討論したり、遠隔指導者が添削したものを閲覧、共有したりできるという利点があり、短期間で学習効果が高まったことを明らかにしている。

阿部(2010)は、日本語専攻の中国人大学生3年生と日本人協力者がSNS上に日記をアップし、それぞれが日記を読んでコメントを記入するというSNS活動を6か月行った結果、SNS活動は日記だけでなくコメントのやり取りが活発になっていることがわかった。

いずれの研究もSNS活用が日本語学習に効果があると述べているが、日本語の学習過程においてどのような能力やスキルが伸びたのか、という具体的かつ実証的な研究ではないことが今後の課題であろう。また、Can Do Statementsを用い、実証的に達成度を調査、分析したものは管見の限り見当たらない。今後、SNSという文明の利器を用いた学習者と、それを用いなかった学習者の間に Can Do Statementsの達成度に差があるのか、SNSを使用した日本語学習者の交流前と交流後において Can Do Statements の達成度に変化があるのか、などを調べる必要がある。

3 Can Do Statements

Can Do Statements(能力記述文、Can-Doと略す)とは、欧州評議会(Council of Europe)(2001)作成の*Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment* (以下CEFRと略す)を言う。邦訳は、吉島茂・大橋理枝(訳、編)(2008)『外国語教育Ⅱ 外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』で、朝日出版社で CEFR ということばを初めて日本語教育関係者が知った用語ではないだろうか。このCan-Doは、実際の言語使用場面で、ということができると例示的に記述した言語能力レベルの指標である。正確さを基にした評価とは異なり、実際の言語使用場面でできることを肯定的に評価した記述文である。CEFRの能力記述文のCan-Doは、言語活動を「産出」「受容」「やりとり」の3つの分野に分けている。国際交流基金(Japan Foundation)もCEFRを基にして、『JF日本語教育スタンダード試行版』(2009年)を作成し、更に、2016年には、更新した「JF Can-do一覧 カテゴリーごと」を公開し、CEFRの能力記述文を参照し、同様に言語活動を「産出」「受容」「やりとり」の3つの分野に分けている。東京外国語大学留学生日本語教育センターも『JLC日本語スタンダード』(2011年)を出版し、CEFRの存在が日本でも大きく普及した。同センター(2017)は「JLPTUFSアカデミック日本語Can-doリスト」を公表している。このCan-doリストには、「読解」「聴解」「文章表現」「口頭表現 - 独話・対話」と4つの領域がある。これらの先行するCan-Doリストを参照し、本調査用で用いるCan-Doリストを新たに作成し、アンケートを行った。

4 研究課題

大きく分けて3つの研究課題がある。一つは、SNS交流群と非交流群の間のCan-Doの達成度による違いがあるか(A)、二つ目はSNS交流群で、交流前と交流後の間でどのようにCan-Doの達成度が変わっているか(B)、三つ目は、韓国人日本語学習者は、日本人学生とSNSを利用した結果、どのような印象を持ったか(C)、を明らかにすることである。より具体的には以下のような研究課題を設ける。

A) SNS 交流群と非交流群の間で、

A-1) Can-Do の全体の達成度に差があるか。

A-2) Speaking & Interaction 領域で Can-Do の達成度に差があるか。

A-3) Listening 領域で Can-Do の達成度に差があるか。

A-4) Politeness 領域で Can-Do の達成度に差があるか。

A-5) Task 領域で Can-Do の達成度に差があるか。

A-6) Can-Do の内容の難易度別に見て、4 領域で Can-Do の達成度に差があるか。

B) SNS 交流群で、交流前と交流後の間で、

B-1) Can-Do の全体の達成度に差があるか。

B-2) Speaking & Interaction 領域で Can-Do の達成度に差があるか。

B-3) Listening 領域で Can-Do の達成度に差があるか。

B-4) Politeness 領域で Can-Do の達成度に差があるか。

B-5) Task 領域で Can-Do の達成度に差があるか。

B-6) レベル別に見て、4 領域で Can-Do の達成度に差があるか。

C) 学習者は、SNS を利用して、どのような印象を持ったか。

5. 調査

5.1 調査協力者

韓国の A 大学と B 大学で日本語を専攻している学生（2年生）を対象にアンケートを行った。A 大学の学生 37 名（韓国人）、B 大学の学生 16 名（韓国人 15 名、中国人留学生 1 名）で、合計 53 名の、中級以上の日本語のレベルの日本語学習者である。

5.2 調査方法

中級レベルの会話の授業を履修している学生に、日本人との SNS を利用した交流を希望する学生（SNS 交流群：22 名）を募り、交流をしない学生（非交流群：31 名）とともに、4 月下旬に第 1 回目のアンケート調査を実施した。このアンケート（韓国語表記）では Speaking & Interaction、Listening、Politeness、Task の 4 領域に関する Can-Do の達成度を 5 件法で自己評価させ、チェックさせた。

その後、交流学生は日本人協力者（日本語教育を専攻している大学生・大学院生）と 1 対 1 のペアになり、1 週間に 2 回程度 SNS を利用して音声通話や画像通話を行っ

た。この活動は5月上旬から韓国の大学が夏休みに入る6月中旬まで続けられ、活動が終了する6月中旬に交流学生ならびに非交流学生に第1回目同様の方法で第2回目のアンケートを実施した。交流学生にはSNSの交流について自由に感想を書いてもらった。アンケートの分析方法はいろいろな視点からCan-Doの達成度を計算し、記述統計でグラフ化した。半年後、交流学生を対象に日本語能力に関する意識調査を行った。

6. 結果と考察

6.1 SNS交流群と非交流群の間のCan-Doの達成度

A-1) Can-Doの全体の達成度に差があるか。

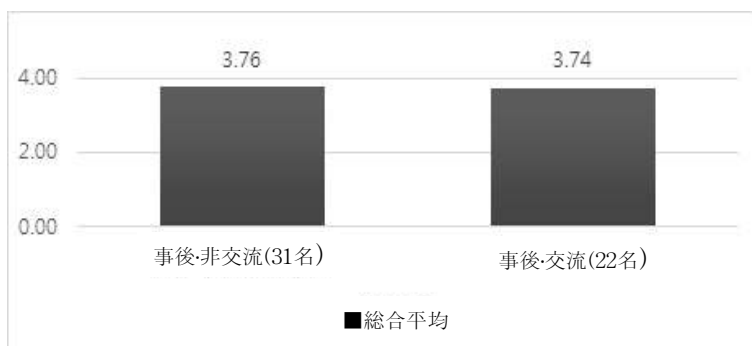


図1 SNS交流群と非交流群の全体におけるCan-Doの達成度

図1から、交流後のアンケートの結果を比較した場合、SNS交流群と非交流群の間で、Can-Doの全体の達成度には、SNS交流群と非交流群がそれぞれ、3.76と3.74となり、ほとんど差がないことがわかった。

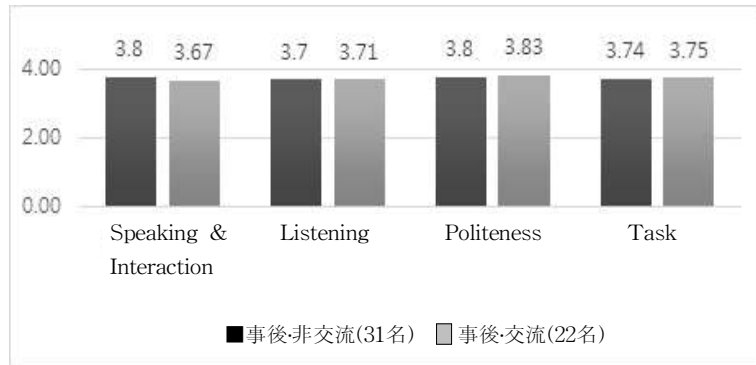


図 2 SNS交流群と非交流群の 4 領域における全体のCan-Doの達成度

また、図 2 から、Speaking & Interaction、Listening、Politeness、Taskに関してもSNS交流群と非交流群の間でCan-Doの全体の達成度にはほとんど差がないことが判明した。

A-2) Speaking & Interaction領域でCan-Doの達成度に差があるか。

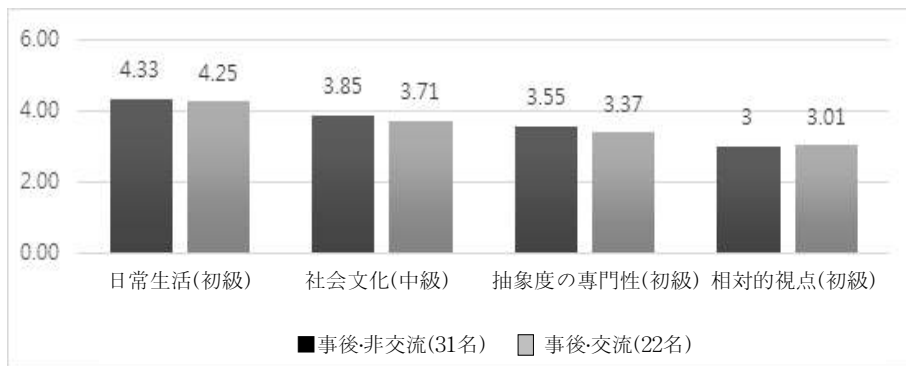


図 3 SNS交流群と非交流群のSpeaking & Interaction領域におけるCan-Doの達成度

図 3 から、SNS交流群と非交流群の間でSpeaking & Interaction領域でCan-Doの達成度はほとんど変わらない。ただし、初級レベルの「日常生活」から超級レベルの「相対的視点」に向かうにつれて、Can-Doの内容が難しくなり、達成度が低くなっていることがわかる。

A-3) Listening 領域で Can-Do の達成度に差があるか。

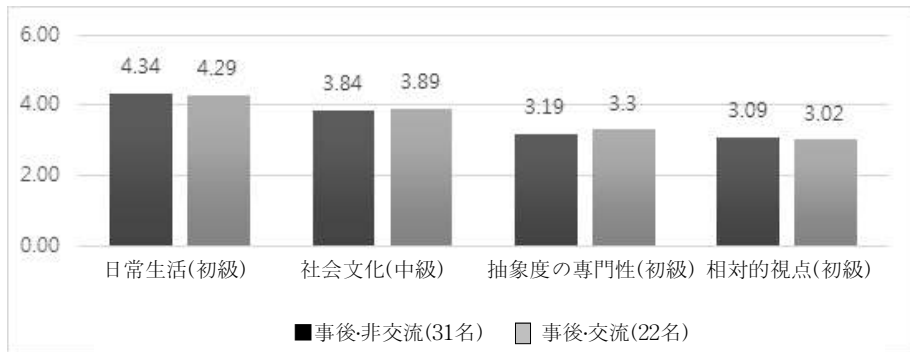


図4 SNS 交流群と非交流群の Listening 領域における Can-Do の達成度

図4から、Listening領域でCan-Doの達成度に差があるかという点、SNS交流群と非交流群で差がないことがわかる。ただし、Listening領域においても、初級レベルの「日常生活」から超級レベルの「相対的視点」に向かうにつれて、Can-Doの内容が難しくなり、達成度が低くなっていることがわかる。

A-4) Politeness領域でCan-Doの達成度に差があるか。

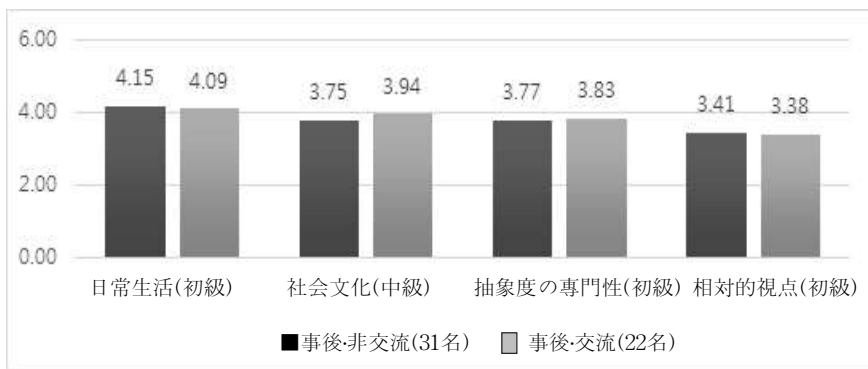


図5 SNS交流群と非交流群のPoliteness領域におけるCan-Doの達成度

図5から、Politeness領域におけるCan-Doの達成度も両群ほとんど差がない。初級レベルの内容の「日常生活」から上級レベルの「抽象度の高い専門性」までCan-Doの達成度がほとんど変わらないが、超級レベルの「相対的視点」だけわずかにCan-Doの達成度が低くなっている。

A-5) Task領域でCan-Doの達成度に差があるか。

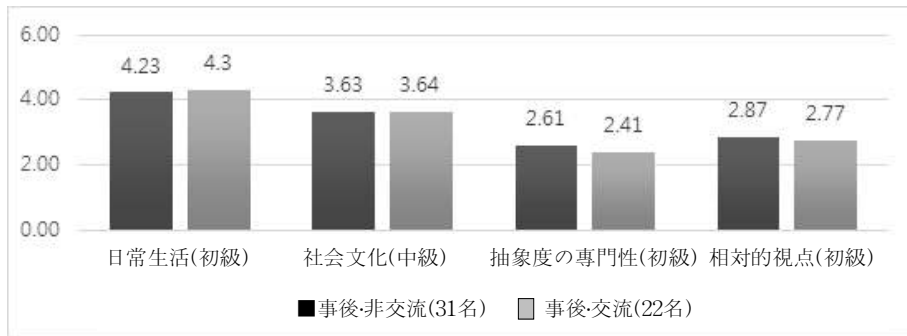


図 6 SNS交流群と非交流群のTask領域におけるCan-Doの達成度

図 6 から、Task領域におけるCan-Doの達成度も両群ほとんど変わらないことがわかった。初級レベルの「日常生活」から超級レベルの「相対的視点」に向かうにつれて、Can-Doの達成度が低くなっていることがわかる。特に、上級の内容の「抽象度の高い専門性」が、もっともCan-Doの達成度が低いように見える。

A-6) Can-Doの内容の難易度別に見て、4領域でCan-Doの達成度に差があるか。

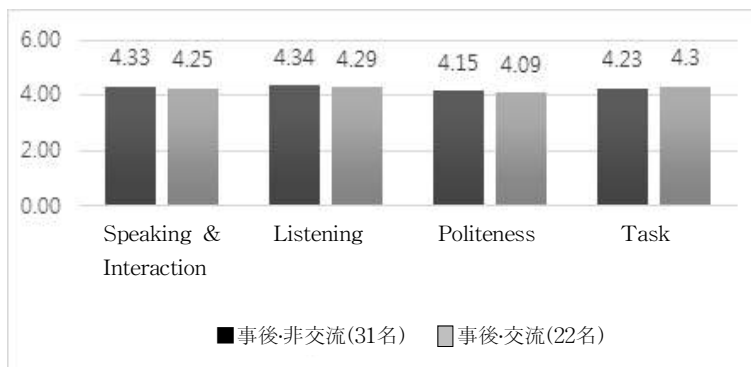


図 7 SNS交流群と非交流群の日常生活に関する「身近な内容（初級）」レベルにおける4領域のCan-Doの達成度

図 7 から、Can-Doの内容が「身近な内容（初級）」レベルの場合は、Speaking & Interaction、Listening、Politeness、Taskの4領域で、SNS交流群と非交流群の間にほとんど差がない。

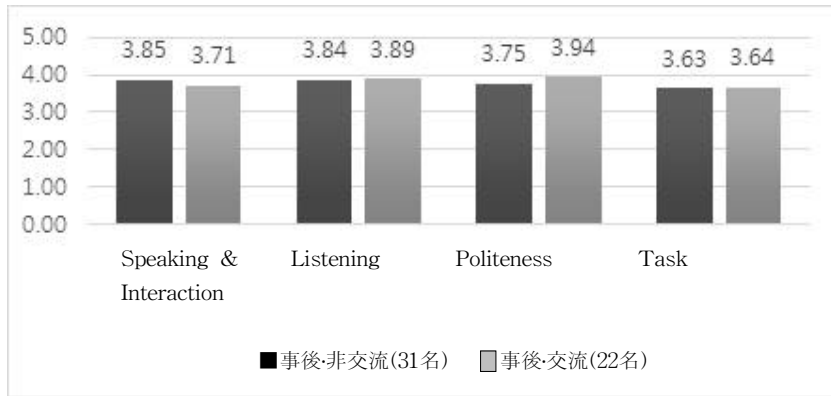


図8 SNS交流群と非交流群の「社会文化的な内容（中級）」レベルにおける4領域のCan-Doの達成度

図8から、Can-Doの内容が「社会文化的な内容（中級）」の場合も、Speaking & Interaction、Listening、Politeness、Taskの4領域で、SNS交流群と非交流群の間にほとんど差がない。

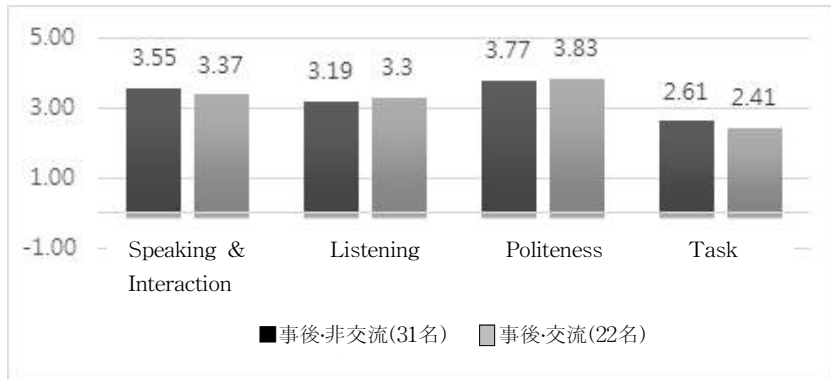


図9 SNS交流群と非交流群の「抽象度の高い時事的な専門的な内容（上級）」レベルにおける4領域のCan-Doの達成度

図9から、Can-Doの内容が「抽象度の高い時事的な専門的な内容（上級）」の場合は、両群ともPoliteness領域の達成度で最も高く、Task領域の達成度がもっとも低い。Speaking & InteractionとListeningの2領域では、その中間程度の達成度である。どの領域もSNS交流群と非交流群の間にほとんど差がない。

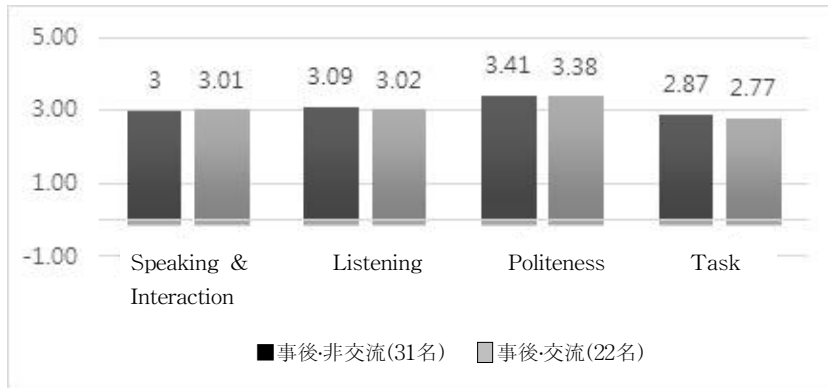


図10 SNS交流群と非交流群の「相対的な視点（超級）」レベルにおける4領域のCan-Doの達成度

図10から、Can-Doの内容が「相対的な視点（超級）」の場合は、両群とも Politeness 領域の達成度で最も高い。他の3領域の達成度は同じくらいである。どの領域も SNS 交流群と非交流群の間にほとんど差がない。

6.2 SNS交流群の交流の前後における変化

B-1) Can-Doの全体の達成度に差があるか。

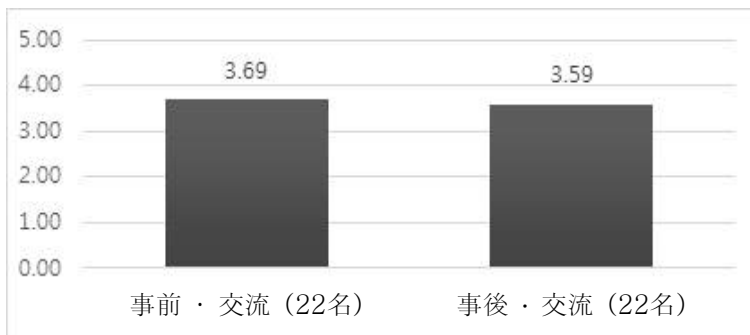


図11 SNS交流群の交流前と交流後の全体におけるCan-Doの達成度

図11から、SNS交流群の交流前と交流後の全体におけるCan-Doの達成度はほとんど変化がないことがわかった。

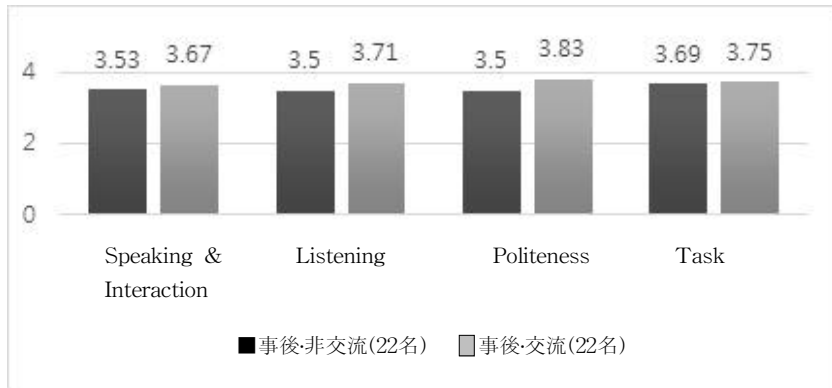


図12 SNS交流群の交流前と交流後の4領域におけるCan-Doの達成度

図12から、SNS交流群の交流前と交流後の4領域におけるCan-Doの達成度を見ると、Task領域は、ほとんど変わらないが、Speaking & Interaction、ListeningとPolitenessの領域では、僅かだが、事後の方が達成度が上がっている。

B-2) Speaking & Interaction領域でCan-Doの達成度に差があるか。

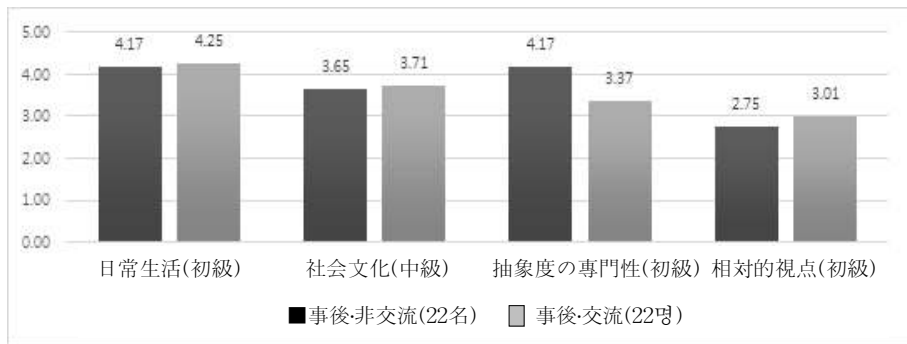


図13 SNS 交流群の交流前と交流後のSpeaking & Interaction領域におけるCan-Doの達成度

図13から、SNS交流群の交流前と交流後のSpeaking & Interaction領域におけるCan-Doの達成度は、「身近な内容（初級）」「社会文化的な内容（中級）」「抽象度の高い時事的な専門的な内容（上級）」が比較的高く、「相対的な視点（超級）」が低いことがわかった。

B-3) Listening領域でCan-Doの達成度に差があるか。

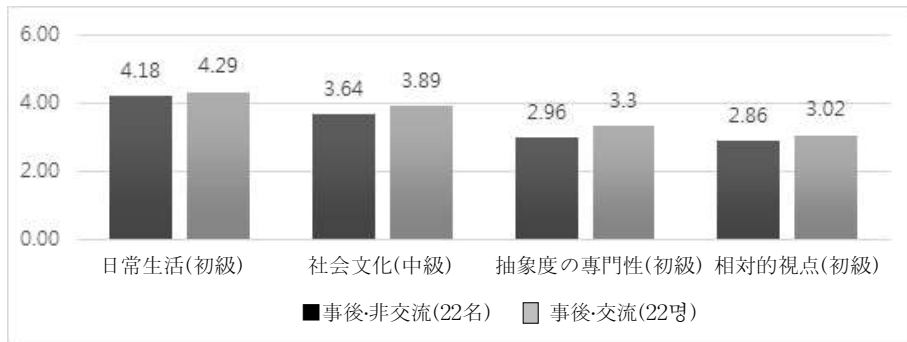


図14 SNS交流群の交流前と交流後のListening領域におけるCan-Doの達成度

図14から、SNS交流群の交流前と交流後のListening領域におけるCan-Doの達成度は、Can-Doの内容が「身近な内容（初級）」、「社会文化的な内容（中級）」、「抽象度の高い時事的な専門的な内容（上級）」、「相対的な視点（超級）」の順で低くなっていることがわかった。ここで注目すべき点は、Can-Doの内容に関わらず、SNS交流群の交流後の方がどのレベルの内容でも交流前より高くなっていることである。

B-4) Politeness領域でCan-Doの達成度に差があるか。

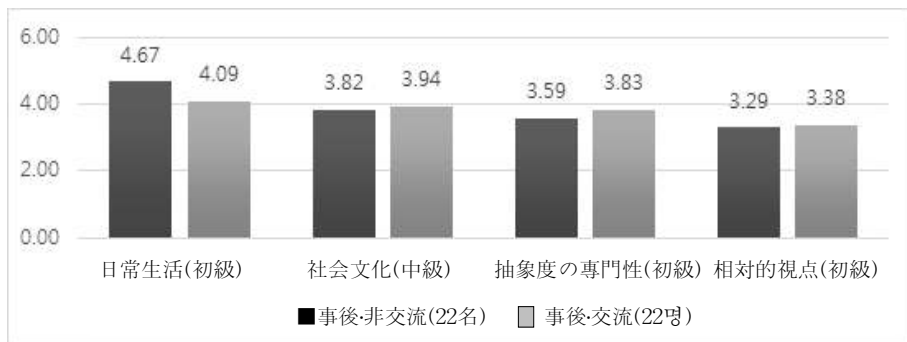


図15 SNS交流群の交流前と交流後のPoliteness領域におけるCan-Doの達成度

図15から、Politeness領域におけるCan-Doの達成度もSNS交流群の交流前と交流後ではほとんど差がない。初級レベルの内容の「日常生活」から超級レベルの内容の「相対的な視点」までCan-Doの達成度が徐々に低下しているようである。

B-5) Task領域でCan-Doの達成度に差があるか。

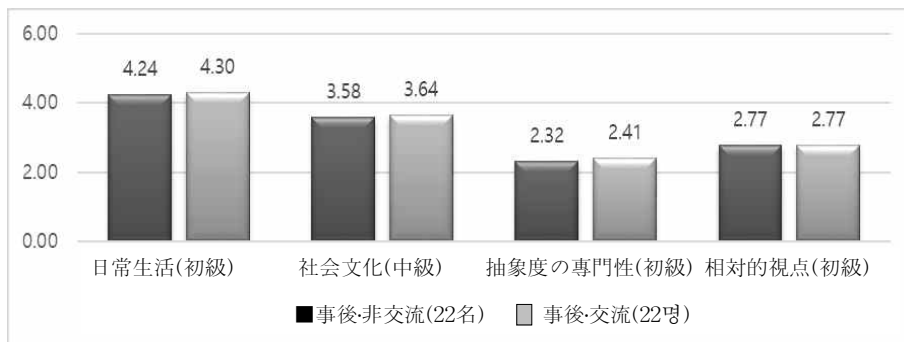


図16 SNS交流群の交流前と交流後のTask領域におけるCan-Doの達成度

図16から、Task領域におけるCan-Doの達成度もSNS交流の交流前と交流後ではほとんど差がない。しかし、初級レベルの内容の「日常生活」から上級レベルの「抽象度の高い時事的な専門的な内容」までかなり達成度の低下が見られる。超級レベルの内容の「相対的な視点」は僅かに上昇しているようである。

B-6) レベル別に見て、4領域でCan-Doの達成度に差があるか。

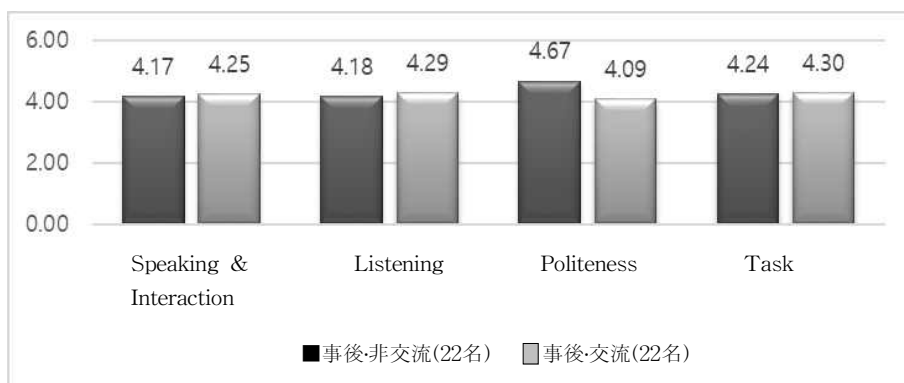


図17 SNS交流群の交流前と交流後の「日常生活に関する身近な内容（初級）」レベルにおける4領域のCan-Doの達成度

図17から、Can-Doの内容が「身近な内容（初級）」レベルの場合は、Speaking & Interaction、Listening、Taskの4領域で、SNS交流群の交流前と交流後の間にほとんど差がないが、Politeness領域だけわずかに差が出ており、交流後の方が低下している。

これは、SNS交流によって、より丁寧に話さなければならないと気づき、丁寧さの意識が高くなり、その分、達成度が低くなったものと思われる。

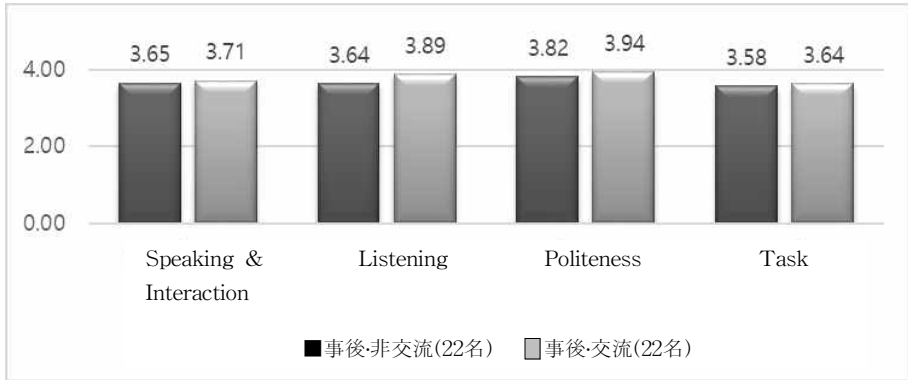


図18 SNS交流群の交流前と交流後の「社会文化的な内容（中級）」レベルにおける4領域のCan-Doの達成度

図18から、Can-Doの内容が「社会文化的な内容（中級）」レベルの場合は、Speaking & Interaction、Listening、Politeness、Taskの4領域で、SNS交流の交流前と交流後の間にほとんど差がない。

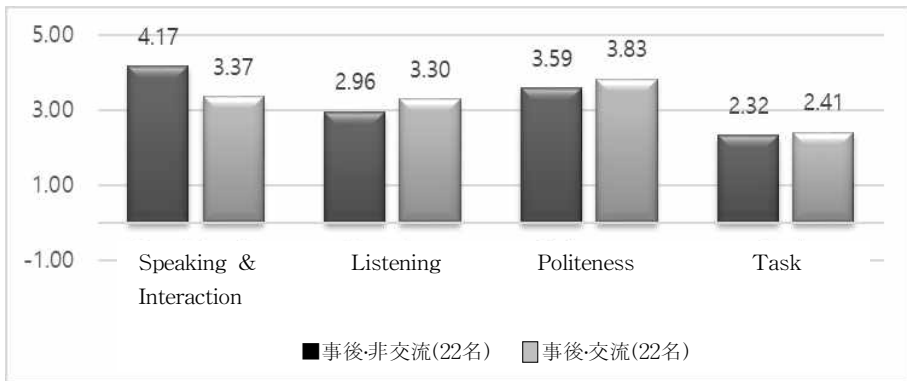


図19 SNS交流群の交流前と交流後の「抽象度の高い時事的な専門的な内容（上級）」レベルにおける4領域のCan-Doの達成度

図19から、Can-Doの内容が「抽象度の高い時事的な専門的な内容（上級）」レベ

ルの場合は、Speaking & Interaction領域では交流後の方が低くなっているが、逆に、Listening領域とPoliteness領域では交流後の方が高くなっている、Taskの4領域では、SNS交流群の交流前と交流後の間にほとんど差がない。Speaking & Interaction領域では交流後の方が低くなっているのは、実際に日本の学生とSNSで交流し、うまく話せなかったことからCan-Doの達成度が低くなっているのではないかと思われる。

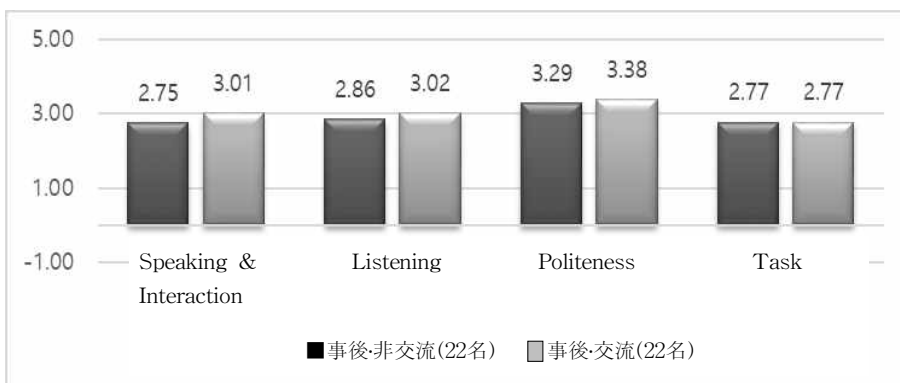


図20 SNS交流群の交流前と交流後の「相対的な視点（超級）」レベルにおける4領域のCan-Doの達成度

図20からCan-Doの内容が「相対的な視点（超級）」レベルの場合は、Speaking & Interaction、Listening、Politeness、Taskの4領域で、SNS交流の交流前と交流後の間にほとんど差がない。

6.3 SNS利用に関する学習者の印象

2018年6月14日、20日にA、B大学にて交流した22名にアンケートを実施した。一人感想を白紙で出した学生がいたが、始めの段階で交流相手からの連絡がなく、他の学生に比べてスタートが遅れてしまった学生である。なぜ白紙で出したのかは確認できなかった。

感想は、詳細に書いた学生が多く、心から満足していることが窺われる。韓国語で書いてもよいと指示をしたが、4名は日本語で書いていた。この交流によって日本語の使用に自信がついたことの現れであると思う。よい機会であった、日本語会話に自信が持てるようになった、実力が上がったと感じる等、交流について満足している内容を書いた学生は16名いた。内容としては、以下のように①日本人学生との交流について述べたもの、②日本語

能力の向上を実感したというものが多かった。③はその他で、以下は21名の感想を日本語訳し、まとめたものである。

表1 SNS交流に関する感想

学生	学年 / 性別	①日本人学生とのSNS交流に関する感想
1	2年生 / 男子	「学校で習ったことを直接使用できるようになるチャンスなのでよかった。外国人と話すことになって自信がちょっと増たような気がする。」
2	2年生 / 男子	「本当にいいプログラムだと思う。これからもこのようなシステムがたくさんできればいい。」
3	2年生 / 中国人留学生女子	「先生のおかげで〇〇（日本人学生の名前）と知りあえた。〇〇と毎週の火曜日に電話を掛けている。日本と中国の文化の違いについて話した。そして日本のお菓子和料理など色々紹介してくれた。日常会話も聴解も練習できるし、とてもいいチャンスだと思った。」
4	3年生 / 女子	「日本人と直接交流して私の実力と、応用方法についてわかる機会となった。そしてお互いの文化を交流して好感の持てる部分を探すのが楽しく、とても意味深い機会になった。少し日本語について自信が持てるようになった。これからは日本語の勉強が面白くなりそうだ。」
5	2年生 / 女子	「はじめは映像通話がちょっと負担に感じたが、何度かしてみたら、相手の反応（表情）を見て会話するほうがもっと楽しいことがわかった。」
6	2年生 / 女子	「顔を見ながら話すことは、ただ文字メッセージで会話することより、状況伝達がとても本当に早くでき、日本語が上手ではなくてもある程度、意思疎通ができるので交流することは苦ではなかった。」
7	2年生 / 男子	「〇〇さんと最近も活発に交流している。このような機会はなかなかないと思っている。良い機会と同じ様に頑張って日本語をペラペラになりたい。」
8	2年生 / 女子	「韓国留学している日本人学生だと韓国に興味がある学生がほとんどだが、今回交流した学生は日本にいる学生で、韓国よりも英語圏に関心がある学生だった。そのため、共通点がありません。会話をするのがいつも大変だった。しかし、私が知りたかった日本についての知識についてとてもたくさん聞くことができ、50分以上も話していた。韓国についてあえて知らない日本人と交流することも可能だということがわかった。」
9	3年生 / 女子	「連絡が中々取れなかったが、連絡ができてからは交流した。4年生の女子で声が綺麗。初めは慣れなくてぎこちな

		かったが、だんだんお互いの専攻について話し私の日本語を上手だと褒めてくれた。この機会に日本語を話したことは会話がまだまだな私には役に立った。」
10	2年生 / 女子	チャットや文字メッセージで連絡する時と違い、とても緊張してしまい、きちんと会話ができていないようで惜しい感じがした。しかし短い期間だったが日本の大学生と話げできたことは幸運だと思った。」
11	2年生 / 女子	〇〇ちゃんと3週間のラインを通じて日本語が上手になったというのは難しいが、日本にいてつきあっている気分になりとても良かった。1度映像会話をした時、日本語ができなくて困ったが、〇〇ちゃんが上手に対応してくれて1時間も会話することができた。」

短期間の交流ながらも日本語会話に自信がついたという学習者の感想があり、地方都市でなかなか日本人と話す機会がない学生にとって、非常に貴重な良い機会となり楽しい経験であったことがわかる。交流相手に関して、趣味や好み合わない学生同士であると大変だったという声もあったが、交流そのものに関しては満足していると思われる感想が多かった。

表2 日本語能力に関する感想

	学年 / 性別	②日本語能力に関する感想
12	2年生 / 男子	「日常会話がとても伸びたことを実感する。」
13	2年生 / 女子	「互いに忙しく積極的に連絡ができなかったが面白かった。敬語よりくだけた表現は大変だったが、この機会に前よりも日本語の実力が上がったと思う。」
14	2年生 / 男子	「初めて連絡した時は緊張してお互い対話ができなかったけど、ずっと電話したら今は本当に楽しい。日本人と色々な話をしたり、交流してもっと上手になったと思う。毎週電話の日が楽しみになっている。」
15	3年生 / 女子	「学校の授業とは違ってリラックスできて恥ずかしくなく話すことができてよかった。交流を通じて自分が不足していた部分がわかった。自然に勉強できる機会になった。自分には確実に役に立ったと思う。」
16	2年生 / 男子	「日本の〇〇大学の〇〇と交流した。初めはzoomというアプリケーションの使用方法がわからなくて苦労したが、後でSKYPEを利用して連絡できるようになった。〇〇君は韓国に関心が多く、夏が終わったら釜山に現場実習をしに来る

		と言った。いろいろな話をして、後で韓国に来たら一度会うことにした。たとえ専門的な話ではできなくても、おかげで日常会話がとても伸びたことを感じている。」
17	2年生 / 女子	今回の交流を通じていい友達ができただけでとても嬉しい。通話は主に韓国と日本についての質問や回答だったが、おかげで気になっていたことがわかった。また、直接日本語を話すことは、日本語の実力が上がったような気がして嬉しい。」

日本語能力が向上したと感ずる内容を書いた学習者は6名いた。また、SNSの音声や映像でのやりとりについては、最初は負担に感じたが、慣れたらとても良かったという感想を書いた学生が2名いた。むしろ、文字よりも音声や映像のほうがよいという肯定的な感想を持つ学習者の存在はSNSの日本語教育への可能性をより感じさせるものであろう。

このように、日本語能力が上がったと感じた者や、当初は緊張したが慣れたらむしろ良かったという満足を得ていると思われる感想が多かった。しかし、実際に交流を行ったことで見えてきた問題点もある。以下のように少数ではあったが、授業外で行う交流の管理体制やSNSの媒体選択について、および交流相手のマッチングの問題を書いた者がいた。

表 3 その他の感想

	学年 / 性別	③その他
6	2年生 / 女子	「時間が合わない場合は、することが大変なのが短所だと思う。」
18	2年生 / 女子	「日本人学生と交流する機会は良かったが、途中で連絡が終わってしまったのは残念だった。」
19	2年生 / 男子	「状況に合う語彙や表現を探して使用することができ、(略)文化について多面的に大きく役に立った。唯一の短所はお互いの関心事が合わなかったこと。」
20	2年生 / 女子	「互いに忙しく積極的に連絡ができなかったけど面白かった。」
21	2年生 / 女子	「ZOOMよりはLINEなどのほかのアプリを使ったほうが良いと思う。」

スケジュールについては、授業外に週1回以上交流して欲しいという指示のみを与え、日本人学生から先に連絡をするということを伝えて時間等は自由に決めてもらっていたが、時間管理や続けることが難しくなっていたベアがあったことが今後の課題である。

SNSの媒体選択について、普段使い慣れたSNSで行いたいという感想があった。交流

前にZOOMの紹介と、文字メッセージではなく 会話、もしくは映像会話をする事だけを指示しており、この学生は教師が事前に新しいSNSを紹介したことで、特定のSNS使用を要求されたと感じた可能性がある。以上の感想は、SNS交流に肯定的な影響があることを示唆するものだと言えるのではないか。

6.4 日本語能力に関する意識調査

交流学生たちの日本語能力に関する意識の変化を調べるために、半年後の11月下旬から12月中旬にアンケート（韓国語表記）を実施した。対象はA,B大学でSNS交流を行った学生のうち18名である。4名は、軍入隊や日本留学のためアンケートを実施することができなかった。アンケートは、会話能力、語彙能力、文法能力、文化理解に関する質問（韓国語表記）について5段階にて回答してもらった。

アンケート内容と結果

- 1 全然そうではない
- 2 あまりそうではない
- 3 どちらとも言えない
- 4 まあまあそうだ
- 5 本当にそうだ

表4 日本語能力に関する自己評価

	会話能力	1	2	3	4	5	合計点	平均値
1	日本人と話すことに緊張や抵抗がなくなった	0	0	2	9	7	77	4.27
2	会話中にわからない言葉や表現があっても前後関係から推測できるようになった	0	0	2	11	5	75	4.16
3	会話中にわからない言葉や表現があっても相手に聞き返すことができるようになった	0	0	2	8	8	78	4.33
4	会話中に自分が話したい言葉が（日本語で）わからなくても、他の言い換えや置き換えができるようになった	0	1	2	10	5	71	3.94
5	以前より長い文が話せるようになった	0	0	3	7	8	77	4.27
6	以前より相手と会話のやりとりが続くようになった	0	1	3	6	8	73	4.05
7	日本語の発音（清音と濁音・長音・促音）が正確に聞き取れるようになった	0	1	4	11	2	66	3.66
8	日本語の発音（清音と濁音・長音・促音）が正確に発音できるようになった。	0	0	3	12	3	72	4
9	日本語のアクセントの違いが聞き取れるようになった	0	0	6	11	1	67	3.72
	語彙能力							

10	以前よりもたくさんの言葉を理解できるようになった	0	0	3	8	7	76	4.22
11	以前よりもたくさんの言葉の意味を辞書で調べるようになった	0	0	1	9	8	79	4.38
12	似たような言葉の意味の違いを認識し、使い分けができるようになった	0	0	3	8	7	76	4.22
文法能力								
13	以前よりも動詞や形容詞の活用がうまくできるようになった	0	0	3	10	4	69	3.83
14	自分がわからない文法や表現を意識できるようになった	0	0	0	10	8	80	4.44
15	文法に多少ミスがあっても気にしないようになった	0	1	3	6	8	73	4.05
文化理解								
16	日本に関してもっと知りたいと思うことが増えた	0	0	0	3	15	87	4.83
17	日本人や日本に対して親しみがわいた	0	0	0	8	10	82	4.55
18	韓国について、韓国文化についても一度考えることができた	0	0	1	9	8	79	4.38
19	日本と韓国の類似点や違いについて考えることができた	0	0	1	8	9	80	4.44
20	より多くの日本人とも話したいと思うようになった	0	0	0	1	17	89	4.94

※13番は無回答1名あり

アンケートの結果、回答のポイントが最も高かったのは、文化理解の項目の「より多くの日本人 と話したいと思うようになった」「日本に関してもっと知りたいと思うようになった」「日本人や日本に対して親しみがわいた」であった。実践的な会話練習により情報や知識を吸収するだけでなく相互理解が深まり、日本と韓国の文化を共有し、さらに深く理解したいという思いが強まっているといえる。これは既存のテキストを使用した学習からは得ることのできない効果である。

また、「自分がわからない文法や表現を意識できるようになった」「文法に多少ミスがあっても気にしないようになった」「似たような言葉の意味の違いを認識し、使い分けができるようになった」などもポイントが高く、自分の日本語能力の足りない部分を認識することと同時に、間違うことを恐れずに積極的に会話をする自信や勇気が身につけていることなどがわかった。そして、語彙能力に関しても「以前よりもたくさんの言葉の意味を辞書で調べるようになった」という設問のポイントが高く、コミュニケーション上の必要性から、積極的に辞書を活用するようになってきていることがうかがえた。

以上のことから、短期間であっても SNS 交流による日本語学習は、学習者のモチベー

ションが確実に高まることが確認できた。

逆にポイントが高くなかったのは、「日本語のアクセントの違いが聞き取れるようになった」「日本語の発音（清音・濁音 長音 促音）が正確に聞き取れるようになった」「日本語の発音（清音・濁音 長音 促音）が正確に発音できるようになった」などで、やはり発音やアクセントを正確に聞き分けることは、短期間では難しいということが確認できた。

7. 今後の課題と次回調査への提案

SNS交流期間が約6週間であったため、交流群と非交流群のCan-doの達成度、ならびに交流群の交流の前と後での Can-doの達成度の変化に顕著な違いは見られなかった。しかし、交流後の学習者の印象や日本語能力に関する意識調査を見ると、短期間であっても SNS交流が学習者の学習意欲を高め、学習者は自身の会話能力を把握し、足りない部分を補いながら積極的に日本人と会話をしよう努力していることが分かった。今後の課題と次回調査への提案としては以下の点が挙げられる。

- 1) 今回は、約1ヶ月半という短期間であったが、次回は少なくとも一学期(3、4ヶ月)はSNS交流活動を続けたい。
- 2) 今回は韓国の大学の2年生を調査協力者としたが、より幅広い日本語レベルの学習者を取り扱い、韓国の大学の1年生から3年生ぐらいまでを対象にし、より大規模な調査をしたい。
- 3) 量的な調査、分析を記述統計レベルで行ったが、推測統計上の検定も行い、より客観的な結果も出したい。
- 4) 量的な調査、分析だけでなく、日記などを書いてもらって、質的な調査研究も同時に進めたい。
- 5) 日本語学習者の外向性、学習戦略、学習環境などの影響がある可能性があるため、事前に詳細な学習者情報を収集、分析し、これらの影響でどれほどSNS交流が活発になり、日本語の会話能力の促進に貢献しているのか、調査したい。

【参考文献】

- 阿部啓子(2010)「SNS(Social Networking Service)を使用した日本人との交流活動の試み—中国における日本語学習者を対象として—」『日本語教育方法研究会誌』Vol.17 No.1, 日本語教育方法研究会. pp.14-15.(DOI:10.19022/jlem.17.1_14)
- 大塚薫(2008)「SNSを利用した日本語作文授業の試み—対面教育・遠隔教育を統合した授業—」『高知大学総合教育センター修学・留学生支援部門紀要』第2号, 高知大学総合教育センター, pp.58-72.
- 奥村三菜子(2015)「CEFRの意義と実践 — 言語教育への可能性 —」ICU日本語教育研究所センター主催講演・ワークショップ 6月26日 於: 国際基督教大学
- 沢恩嬉(2017)「日本語学習者と日本語母語話者のチャット会話分析」『日本語教育方法研究会誌』Vol.23 No.2. 日本語教育方法研究会. pp.2-3.(DOI:10.19022/jlem.23.2_2)
- 沢恩嬉・渡辺文生(2014)「初級日本語学習者のための「つながり」を目的とした遠隔授業の実践」『日本語教育方法研究会誌』Vol.21No.1, 日本語教育方法研究会. pp.56-57. (DOI:10.19022/jlem.21.1_56)
- 末松大貴(2017)「「新しい日本語学習者」の実態と学習コミュニティに対する評価 Facebookグループ「The 日本語 Learning Community」での調査結果から」『言語文化教育研究』第15巻 言語文化教育研究会. pp.172-193.(DOI:10.14960/gbkkg.15.172)
- 高橋敦(2014)「社会的視点から見た第二言語習得におけるオンラインコミュニティの可能性と管理者の役割 — Facebookを用いた実践から —」『言語教育研究』5、桜美林大学大学院言語教育研究科. pp.41-58.
- 当作靖彦(2013)『NIPPON3.0の処方箋』講談社
- 日木くるみ(2010)「関西外大—バックネル大学Facebookプロジェクト2009: Facebookを使った実践的コミュニケーションの試み」『関西外国語大学研究論集』第92号, 関西外国語大学. pp.171-184.
- 藤井清美・魚立康夫・ライト プレント・松橋由佳(2015)「日本とアメリカの大学間におけるFacebook交流-教室外における有意義な言語学習環境の提供を目指して—」『日本語教育方法研究会誌』Vol.22, No.2, 日本語教育方法研究会. pp.28-29.(DOI:10.19022/jlem.22.2_28)
- 松下由美子・西花恵子・坂本正(2018)「日本語教育ならびに日本語習得研究におけるSNSの活用—これまでとこれから—」『日本文化学報』第77輯、韓国日本文化学会. pp.233-250. (DOI:https://DOI.org/10.21481/jbunka..77.201805.233)
- Council of Europe(2001) *Common European Framework of Reference for Languages Learning, teaching, assessment*. Cambridge: Cambridge University Press.
- [Council of Europe(2008)『外国語の学習、教授、評価のためのヨーロッパ共通参照枠』吉島茂・大橋理枝(訳、編)、朝日出版社]
- 「JF Can-do一覧 カテゴリーごと」(2016):
https://jfstandard.jp/pdf/20160623_JF_Cando_Category_list.xls(検索日: 2018.08.06)

논문 투고 일자 : 2019. 04. 08.
논문 심사 일자 : 2019. 05. 03.
게재 확정 일자 : 2019. 05. 07.

 <要旨>

SNS利用で会話能力が伸びるのか

— Can Do Statementsと交流後の意識調査を基にして —

西花恵子・松下由美子・坂本正

本稿は、実際に日本人とのSNS (Social Networking Service) 交流に参加した韓国日本語学習者の口頭能力が伸びているのかを調査したものである。松下他(2018)では、韓国日本語学習者がどのようなSNSを使っているのかを調査している。今回は、日本在住の日本人大学生と韓国大学生の学習者22ペアにSNSを使用した交流を行い、また、前後でCan-Do Statementsのアンケートを実施した。さらに、SNS交流群と非交流群との比較も行った結果、今回は調査期間が1か月半の短期間であったためか、あまり差は見られなかった。しかし、アンケートによる感想を見ると、今回の交流について学習者はおおむね満足しており、「日本語会話能力の伸びを感じた」「日本語使用に自信が付いた」等と書いていた。更に、半年後に韓国語による追加のアンケート調査を行った結果、「より多くの日本人と話したいと思うようになった」「自分がわからない文法や表現を意識できるようになった」「以前よりもたくさんの言葉の意味を辞書で調べるようになった」など肯定的な評価が得られた。交流の改善点としては「授業外での交流の管理」「SNSの媒体の選択」「交流相手のマッチング」などが明らかになり、今後の参考にしたい。さらに、日本語学習者の外向性、学習ストラテジー、学習環境等の影響がある可能性があるため、事前に詳細な学習者情報を収集および分析を行い、これらの影響でSNS交流がどう活発になり、日本語の会話能力の促進に貢献しているのか更に詳細に調査する必要があることがわかった。

The Use of Social Media for the Enhance of Student Conversational Skills

— Focus on “Can-Do” Statements and an Additional Survey —

Nishihana, Keiko · Matsushita, Yumiko · Sakamoto, Tadashi

This paper addresses the improvement of oral proficiency in Korean learners of the Japanese language who engaged in interactions with Japanese native speakers based on the results of a survey. Twenty-two pairs of Japanese and Korean students interacted on social media through video- or voice-calls. Before and after these interactions, the Korean students were asked to fill out a survey using “Can-Do” Statements. The group of students who engaged in the social media interactions were then compared with a group of nonparticipant learners of Japanese, and no differences were found in Japanese language acquisition between the two groups in this one-and-a-half month study. However, the results of the survey demonstrate that the learners who engaged in the interaction were satisfied with the experience. Their comments included statements such as, “I feel that my conversational skills have improved,” “I feel more confident about how I use Japanese,” and “I understood the conversation better, because we used video-calls instead of text messages.” Six months later, an additional survey was conducted in Korean and the comments obtained from it were as follows: “I want to talk with more Japanese people,” “I have become conscious about grammar and words I have not learnt yet,” and “I started checking the dictionary more often.” The participants also indicated that managing interactions out of the classroom, the choice of the social media used, and matching conversation partners were potential ways to improve the social media experience.